
理由がない悪意のクエスト。

オシノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理由がない悪意のクエスト。

【Nコード】

N2565Z

【作者名】

オシノ

【あらすじ】

生活に困った冒険者。つまり僕のことなんだがお金欲しさについて、身の丈に合わない仕事を請け負ってしまった。スライムにトロール。マッドサイエンティストが造った【キラーマシン】、拳句の果てにはベテランの冒険者、あまつさえ王家に選ばれた勇者でさえも手を出さない魔女とまでやりあうことになってしまふ。一緒に戦ってくれる仲間もいなければ、友達もない。孤立無援の貧乏人が、レベル不相応のクエストに挑む冒険ファンタジー。

・冒険のはじまり

+++

お金がない。

安定した収入もない。

人望もない。

恋人もいない。

このままでは、魔王を倒す戦士としてやっていけるかの自信もない。

いや、自信が無いだけなら取り戻せばいいのだが、問題はそんな簡単なモノではなかった。

この先、冒険者としてやっていく展望がなかなか見えないからだ。要するに、今現在のこの職業に一抹の不安を持っている。

考えてみれば三年前。

「僕は、世界一の冒険者になる」と言って実家を飛び出さしたは良いが、現実はそのなに甘くなかった。

勇者一族の血統を引く人間なら、王家から経済的な支援を受けられるし、なにか他の冒険者が持っていないような特技（例えば魔法）を持っていればギルドからスカウトがきて仕事に困ることもない。が、僕はサラブレッドでもなければ他人より秀でた特技もない。国からの支援も無ければ、ギルドに頼ることもできないのだ。冒険者という人生に、僕は完全に行き詰っていた。

けれども食べていくためには、モンスターや賞金首を倒してお金

を稼がなければならぬ。

今住んでいる部屋の家賃は二カ月滞納しているし、水も止められた。

僕は情報を集めるために酒場に来た。酒場のいつかには情報幹旋所がある。

そこにはこの地域一帯の情報が集まってくる。

賞金首や、倒すとお金がもらえるモンスターの情報。新しいダンジョンが近場で発見されればそれを教えてもらうこともある。

酒場の端っこにある小さなカウンターが情報幹旋所として使われていた。

一人がけの椅子に狭いテーブルがあるだけのそのカウンターは、酒場にあるが酒を飲むためにあるわけではない。

そこには何年もこの仕事を続けているであろう、手と顔に長い時間を物語るシワが深く刻まれたバアさんが座っていた。

「仕事の情報を貰いにきたよ。バアさん」

「おお、また来たのかい。ご苦労さんなことだね」

お互い名前を知らない。それくらいの薄っぺらな関係なのだ。仕事の情報を聞ければ、僕はそれでかまわないと思っている。

「それでどうだい、なにか良い仕事は入った？」

「良い仕事はみんなギルドに持ってかれちまってるよ。場末のこんな所に回ってくる依頼はどうしようもない下らないものか、ギルドや勇者でも手に負えないようなドギツイ仕事だけさ」

そんな仕事はやりたくない。

けど食べていくためにはやるしかない。お金が無いのだ、仕事を選べる立場ではない。

「レベル3の冒険者でもこなせるような簡単なクエストないの？」

「うーん、レベル3ねえ。今は初心者にちよつときびしいような仕事しかないねえ。アンタ特技はなんだい？」

「……特にありません」

自分に自信が無かったので小声でささやくように言うと、

「なんだつて？聞こえないよ！」年寄りの耳には聞こえなかったらしく聞き返された。

「うーん、特にないんだけど、しいて言えば孤独に耐える能力が高いですね」

聞こえるように少し大きめなけで言いなおした。

「……使えないねえ。今の時代は人より秀でたものが一つ二つ、いや三つ程ないとやっていけないよ。だいたい孤独に耐えるって仲間がいらないだけだろ。それじゃあウィークポイントだよ」

「……」

言われてみればバアさんの言うとおりだ。

・酒場から自警団までの道のり

「今はアンタみたいな低レベルの戦士が単独でこなせるようなクエストはないね」

「そこを何とかお願いします」

手を合わせ、まるで神様を拜むようにバアさんに手を合わせる。

「そんなコト言われたってないものはないよ。自殺志願者だったら別だけどね」

死にたくはない。だがこのまま仕事をしなかったら餓死してしまう。

状況的には、引くに引けない。

まるで前門の虎、後門の狼。

「畜生……。僕はどうしたらいいんだ」

「そんなに困っているなら借金でもしたらどうだい？」

何を言っているんだこのバアさんは。ギルドにも属していないこんな低レベルのただの戦士に金を貸してくれる金融業者なんて、何処にあるだろうか。

あるわけがない。僕が金貸しだったら絶対に貸さない。

「借してくれる所なんてありませんよ。あー、僕にまだ目覚めぬ、眠れる力とかが宿っていればいいんだけどなあ。その力は強力な魔法で、ドラゴンでも一撃で倒せるみたいなの」

「何言ってるんだい。人生はそんなに甘くないよ。そんなモノあるわけないだろ」

軽く怒られた。夢も希望もない人生だ。

「まあ、そんな話しはどうでもいいんですけど、ちょっと無理目の依頼でもいいんで、何かないですかね？」

「ないよ。また違う日に来な」

おそらくもう僕の相手をしたくないのだから、少し機嫌が悪くなってきた。

「そんなこと言って、良い依頼を隠してるんじゃないの？」

バアさんに食い下がる。

「しつこい！」

怒鳴られた。怒らせてしまったようだ。

これ以上機嫌を損ねたら、依頼を斡旋してもらえなくなる。

僕はこれからの付き合いを考えて酒場を出ることにした。

「町の近くにいるスライムや、吸血コウモリを倒しても金にならないしなあ」

町の自警団に属していれば、迷惑モンスターを倒した場合に討伐料が出るのだが、僕が勝手にモンスターを退治しても何もでない。

骨折り損のくたびれもうけだ。

くたびれるどころか死ぬ危険性まである。

なんとか日銭を稼げる方法を考えて思いつかない。

人間、地道に働かなくてはいけない。

けれども今の状況の僕では、それをすることもできないのか

まあ、何でもいいからできる仕事を探すか。

この際、モンスター退治やダンジョン探索の仕事じゃなくても良いんだ。

道具屋や武器屋でも、この際ゴミ掃除やパン屋でもいい。生きるために働く。

僕は、町の入り口の近くにある自警団の建物へ歩いていく。

自警団は町をモンスターや盗賊から守るだけでなく、町の治安を守ったり、落し物を探したりしてくれる。

道に迷った時なんかは場所を教えてくださいもするのだ。

僕はその建物の入り口に立っていた人物に声をかける。

「すみません。ちょっと職業安定所までの道を教えてもらいたいですけど」

職業安定所とは、仕事がない人に働く環境を提供してくれる場所のことであつた。

・自警団にて

入り口に立っていた人が道案内担当の人を呼びに行く。
椅子があつたので、座って待っていると目の前に賞金首の張り紙があつた。

・狂った科学者の操る【キラマシン】
研究所を自らが作ったマシンで全て破壊した科学者。犯人以外の
研究員は全員死亡。

賞金：15000ゴールド

・人喰いピーグル
狂犬。飼い主の命令を聞かない。捨てられた。

賞金：800ゴールド

・堕ちた天使
人を食うことを覚えてしまった天使。一度人の肉を食べた天使は
その味を忘れない。
光術系の魔法を使う。

賞金：2400ゴールド

・ 始の魔女

以前この国を救った英雄の一人。国王に逆らったために賞金首になった。

道具に魔法をこめることができる。

賞金：9999999ゴールド

おいおい、最後の魔女の賞金。シャレになつてない。こんな敵に合つたら、僕なんかは一瞬で消し炭になつてしまう。

間もなく奥のほうから、自警団の人が来た。さつきとは違う人だ。きっと、道案内を担当している人だろう。

僕に近づいてくると、声をかけてくれた。

「えーっと、職業安定所までの道のりだったかな？」

初老の男性だ。着ているねずみ色の制服は、良い感じに使い込まれている。

古くなつてはいるが、キレイな制服。

「はい、お願いします」

僕がそう話すと道順を覚えてくれた。

あまり解りやすくなかったので紙に道順を書いてもらう。どうやらこの町の役所近くにあるようだ。

ここからそんなに遠くない。歩いて行くことにしよう。

「ちなみにさつきその張り紙見てたよね？」

道を教えてくれた自警団の人が話しかけてくる。

「ああ、賞金首が載ってるやつですね」

「何か情報あつたら、すぐに教えてくれよ」

「いいですよ。解りました」

「ただし、見つけても絶対に手を出すなよ……特にキラーマシンと魔女はな。殺されるのがオチだぜ」

言われなくてもわかっていた、僕のレベルで勝てる相手じゃない。キラーマシンや魔女と言わず、どれと戦っても一瞬で負ける自信がある。

・研究所

+++

「チクショウ……。ロクな仕事が無かったぜ」

やはり職業安定所に行ってもたいした仕事が見つからなかった。保証人がいない人間には、まっとうな仕事がないらしい。

唯一あつたのは『研究所での実験お手伝い』のみ。

仕事の説明が書いてあるパンフレットには、
短時間で高収入を目指す人集まれ。

保証人不要。

年齢、経験不問。

給料即日払い。

資格必要なし。

くわしい実験内容は、集合場所で説明させていただきます。
やる気がある人を募集しています。

なんてことが書いてあった。

この募集内容から察することができる。

要するに誰でもいいってことだろ。

「すげえ怪しい」

何をさせられるのだろう。

研究所での実験と言うからには、

怪しいクスリを飲ませるのだろうか。
それとも怪しい人体実験が行われるのだろうか。

怖い。すげえ怖いけどやるしかない。でもまあ、とりあえず行ってみて駄目そうだったら帰ってこよう。

その時の僕の考えは、そんな感じだった。
でも、この時の甘い考えのせいでとんでもない事件に巻き込まれることになるのだ。

仕事するための研究所に着くと、そこには結構な人数が集まっていた。

筋肉ムキムキで、体中に傷がある戦士。

老齢の魔術師。杖は相当使い込まれている。

この地域ではあまり見ることがない魔獣使いまでいた。

使役している魔獣は、

【八愛】猫を大きくしたような魔獣。強力な牙で相手を噛み砕く。
人なっつこい。

【一角】人間に成り損ねたサルの成れ果て、鼻の所にある角で敵を貫く。

【波紋】詳しい能力は知らない。
見るからに歴戦の猛者だ。

しかも、そんな連中ばかりではない。

どう見てもズブの素人のような冒険者も結構いる。2、30人と
いった所だろうか。

装備してるモノがお粗末だ。

ほとんど使ったことがないような、真新しい剣や鎧を装備してい
る。

おそらく短期間、高収入という内容に惹かれて来たんだろう。
もちろん僕もその中の一人であることは言うまでもない。

・研究所でのアルバイト！

+++

「この研究所での仕事を始めてもらう前に説明があります」
そう言ったのは、見た目が若い女性だった。

少しだけ笹のような形の耳から察するに、エルフの血を引いているのだろう。

正確な年齢はわからない。

エルフ族の寿命はあきれるほど長いからだ。

例えわずかながらでも、エルフの血が混じっていれば相当長く生きることができる。

「実験を始める前に、みな様にはこの待合室で順番待ちをしていただきます」

今いるこの部屋は相当広い　待合室っていうより、運動場、もしくは闘技場といったほうが相応しい感じだ。

場所は地下一階にある。遙か上にある天窓から光が入ってくるため暗くはない。

耳の上がった女性の話す内容は決まっているのであろう。
手にあるメモ紙を見て淡々と説明をはじめた。

「今から番号札を配ります。それは無くさないようにしてく

ださい。

説明する内容は、簡単なモノです。

実験が始まったら、この部屋からスタッフはいなくなります。

我々スタッフは全員、研究で手が離せなくなるためこの部屋にいることはできないからです。

実験が始まったら、研究所の機密情報の管理関係上、みな様はこの部屋から出ることができなくなります。

私はこの部屋から退出しますが、その時に外側から鍵をかけさせていただきます。

その鍵は実験終了後に解除されますので、トイレなどは今のうちに行っておいて下さい。

誰か生きたい人はいますか？

誰もいないようですね。

行われる実験は3段階ほどありますので、皆さんにやっていただくコトはそのつど説明いたします」

以上が説明の内容。

「なにか質問はありますか？」

耳のとがった女性がそう言うと、僕の隣にいた男が質問をする。

「今からこの仕事をやめたいと言ったら、それは可能なのかね？」

先ほど、この研究所の入り口で見かけた老魔術師だ。

「ええ、かまいませんよ。ただし、この部屋には残っていただきます。実験には協力せずこの部屋の椅子にかけてお待ちください。すべての実験終了後に依頼キャンセルの手続きをとらせて頂きます」

質問はそれだけだった。

そして、実験は始まる。

「これはハメられたかもしれないのお」
僕の隣にいた、老魔術師が言った独り言が聞こえてきた。

・研究所でのアルバイト！

++++

やがて、耳の長い女が部屋から退出すると鍵がかけられた。これで実験が終わるまで誰も外に出ることができない。

室内放送が流れた。

締め切られた部屋で、先程の耳の長い女の声が聞こえる。

「それでは実験を始めさせていただきます。まず皆さんは、部屋の奥から出現するマシンと戦っていただきます」

たったそれだけ言う放送は終わってしまった。

さつき老魔術師が言っていた言葉が気になっていた。

ちょうど僕の隣に座っていたので質問をすることにする。

「なんですか。ハメられたって？」

「今にわかるじやろ」

そっけない答えが返ってくる。

目の前から何か出てきた。先程アナウンスされた実験のための機械が出現する。

人間を模したマシンのようだ。

馬鹿でかい体は金属製の三角すいを逆にしたようなカタチをしており、そこから細長い手と足が生えている。

左手には、銃弾を連射できるガトリングガン。

右手には、とうてい人間には扱えないだろう、大型のサーベルが装備されていた。

人間に例えると顔に当たる部分には、簡単なカメラが付いている。継ぎ目の少ない流線型をベースにした無機質なデザインが不気味さを漂わせる。

装備されている武器から想像するに十中八九、戦闘用のマシンと
いうことで間違いないだろう。

「ん？何処かで見たことがあるな」

最近、見たような記憶があるのだが思い出せない。

僕はしばらく考えていると誰かの叫び声が聞こえた。

「うわああああ！賞金首リストのキラーマシンだ！！」

僕はその声を聞いてやっと思い出す。

道を聞いた自警団で見た賞金首リストの張り紙に載っていた賞金
首。

【キラーマシン】が現れた。

キラーマシンは戦闘体勢をとっている。

左手のガトリングガンを構えた。

「ほらの」

老魔術師が言ったとおりだったろといった顔で僕に話しかけてく
る。

「これはどういうことですかね？」

目の前で起きたことに思考が追いついていかない。

僕は何が起きているか理解できていなかった。

「閉め切られた部屋に賞金首がいる状況が作られた。最初の女の
言っていた実験というのは、このマシンの性能テストと言ったこと

るか……」

老魔術師がそう言い終わると、

「嘘は言ってませんよ。この実験が終われば皆さんはこの部屋から出られますし、お給金もお支払いします」

さっきの女の声が部屋のスピーカーから聞こえる。

「ただし生きてこの部屋から出てこれたらの話ですけど」

・研究所でのアルバイト!!!

+++

部屋の中は、混沌としていた。

戦闘体勢を取る者に、最初から勝てないと踏んで逃げ惑う者。

部屋から逃げるために入り口のドアを開けようとする奴もいたが、鍵がかけられた金属製の分厚い扉はビクともしなかった。

そんな逃げ惑う者達に向かって「キラーマシン」が左手のガトリングガンで攻撃する。

炎撃の銃弾で攻撃。

入り口付近にいた男に、全弾命中。

攻撃を受けた男はダメージを受けた後に炎上。

消し炭なつて死んでしまった。

それを見た多くの人間は、後ずさる。

たった一度、今の攻撃を見ただけで攻撃力の違いが解った。

それほどまでに圧倒的。高額賞金首である【キラーマシン】の戦闘力は異常だった。

『戦ったら殺されるのがオチ』

自警団の人に言われたことは間違いではなかった。

部屋に絶望に似た雰囲気の流れ始める。

その中で勇敢にも戦いを挑む者もいる。

いくつもの厳しい戦闘をこなしてきた、戦闘のプロ。

体中に傷がある戦士と魔獣使いが戦闘態勢に入る。
老魔術師は、まだ戦闘に参加する気配はない。様子を見ているの
だろう。

正直な所、僕は賞金稼ぎではない。ここは専門家に任せるとしよう

魔獣使いは使役している【八愛】【一角】【波紋】を放った。

【キラーマシン】にいつせいに襲い掛かる。
しかし、全くダメージを与えられない。

【一角】は角が根元から折れてしまい戦闘不能。

【キラーマシン】は雷撃の銃弾を放った。

左手に装備されたガトリングガンから、雷撃の特性を持った銃弾
が無数に発射される。

【八愛】に命中。死んでしまった。

銃弾だけで死んでしまった【八愛】の死体に電撃の魔法が発動。
バリバリといった激しい音と共に、死体は消し炭になり無くなって
しまった。

【波紋】がキラーマシンに襲い掛かる。体にへばりつき自爆した。
強烈な衝撃波と炎がキラーマシンを襲う。

爆風が部屋全体に吹き荒れる。

キラーマシンは、鉄でできたボディが少し歪んだ。

魔獣は全部死んでしまった。

使役している魔獣が全滅してしまった魔獣使いは、逃げようとし
ている。

【キラーマシン】は、右手のサーベルで魔獣使いを攻撃した。
魔獣使いは、真っ二つに切り裂かれされ死んでしまった。

それを見ていた老魔術師は、

「コレはまずいのう」と話す。

「そんなこと言われなくてもわかってますよ！」

見れば解る。強力な魔獣を使役している人間が一瞬で殺されたのだ。

残った奴ら全員で戦っても勝てる可能性は少ないだろう。

・研究所でのアルバイト!!!!

+++++

部屋の残り人数は、後半分といったところだろうか……。
ずいぶんと減ってしまった。

【キラーマシン】に戦闘を挑んでいった冒険者はみんな死んでしまった。

僕が殺されるのも時間の問題だ。

「おまえさん。ワシに協力するんなら助けてやるぞ」
老魔術師に話しかけられる。

「なにか作戦があるんですか？」

喜んで協力しよう。

どうせこのまま手をこまねていてもゲームオーバーなるだけだ。

「お前をワシが使う転送の魔法でこの部屋から出してやる」

転移魔法。人の体を離れた場所に転送する。

高度な魔法技術が要求されるため、使える人間は一握りだけ。

転送できる距離は、術者の能力に比例する。

「おお、使える人間始めてみた。すごいなジイさん」

そんな便利な魔法が使えるんだったら、この閉ざされた部屋から脱出できる。

「しかし、条件がある」

「なんだよ」

悠長に話してる暇はない。いつ敵に襲われるか解らないのだ。

「実はワシの魔法なんじゃが……。自分以外の一人だけしか転送できない。魔力の関係から使えるのは一回だけ、そして距離は3メートルほど」

「短い距離でも、この部屋から出られればいいけど……」

例え僕がこの部屋から出れても、中に残ってる奴は逃げられない。みんなキラーマシンに殺されてしまうだろう。

「それでこの部屋から出て、やってもらいことがある」

「なにをやればいい？」

老魔術師は頷いて話した。

「あそこで暴れている【キラーマシン】、おそらく部屋の外に操ってる奴がいる」

「そうなの？」

「ウム。あれはモンスターじゃない。魔法で動く機械じゃ。だから単独で動くことはできない」

「そういうものなんだ」

僕は頷いて話を聞く。

「そして、操ってる奴なんじゃが　おそらく戦闘力は低いだろう」

「なるほど。だから僕たちを、この部屋に隔離したわけだ……」

「その通り。だからこの部屋から出た後にそいつを探し出して倒して欲しい」

「ジイさんは、誰が操っているのか心当たりあるのか？」

「わからん。じゃが、あれ程大きな機械を操っているのだから相当な集中力があるはず」

「とりあえず動きを鈍い奴を探せばいいか……」

「そうしてくれ。ここはおそらく、後10分もたないじゃろう。急いで行け」

「わかりました」

二人でやることを確認し終わると、老魔術師が魔法を唱え始める。僕は、詠唱に邪魔が入らないように辺りを見回す。

高度な魔法には、とてつもない集中力がある。

この魔法は失敗するわけにはいかないのだ。

しばらくして詠唱が終わると、僕の体はスライムのようなゲル状になってドアの隙間から出ることができた。

「なんか思ってたのと違うな……」

魔法により体が光に包まれて移動するのかと思ったら、そうではなかった。

・アルバイト終了

外に出て一番最初にやることは、ドアが開閉できるかの有無である。

内側から開かなくても、外側からは開けられるかもしれない。けどそれは甘い考えだった。

この扉にはドアノブがない。どうやら魔法で開け閉めするタイプのようだ。

急がないと中にいる奴らがどんどん死んでいってしまう。

ドアはあきらめて、当初の予定通り【キラーマシン】を操っている敵を倒すことにした。

似たような扉に同じつくりの通路。

これでは自分が何処にいるか解らなくなる。

でもある程度目星はついていて。

頭の中で最短ルートを計算し、そこに向かって全力で走った。

マシンを操っている術者は、無防備になる。

ということはなるべく離れた場所に身を隠すのだろうか。

でも、あまり離れすぎると【キラーマシン】のコントロールができなくなるかもしれない。

あれだけゴツイ機械は、遠方から操るとなると相当厳しいだろう。

近くで身を守ることが出来る安全な場所

僕が今までいた部屋は地下一階だった。この建物の最下層の場所である。

ということは

おそらくこの場所にいるに違いない。

1階にある『ミーティングルーム』

ちょうど僕がさっき【キラーマシン】に殺されそうになっていた部屋の真上に位置する場所。

さっきの部屋に一番近い。

でも階が違うから、この場所に来るまで時間がかかる。だから安全。

目的地に着くや否や、僕はそのドアを蹴破る。

予想通り人がいた。

僕らに実験の説明をしていた、エルフの血を引く耳の長い女だ。

「なんですかアナタは？」

「……まさかアンタが狂った科学者だったとはね。悪いけど時間がないから。サクッと殺らしてもらっぜ」

僕はそれだけ話すと、腰にさしていた剣を抜き相手に突きつける。

「ちょっと待って下さい！キラーマシンを止めますから見逃してください！」

慌てふためく耳の長い女。

この反応。やはりこの女で間違いなかったようだ。

「ここからじゃあ、【キラーマシン】が停止しているかどうか確認できない……。しかもこの間にも人が死んでるかも知れない。だから駄目だ」

僕はそう話すと、耳の長い女に斬りかかった。

一撃でカタがついた。

老魔術師が予想していた通り、操っている奴は弱かったのだ。
耳の長い女が倒れると、彼女の体からアイテムが落ちる。

> キラーマシンの腕輪<を手に入れた。

+ + +

けれど一足遅かったようだ。

急いで一番最初にいた部屋に戻ったが全員死亡していた。

・アルバイト終了 その後

+++

僕の命の恩人の老魔術師。

助けられなかった。亡骸は土に埋め、墓標の代わりに魔術師が使っていた杖を立てる。

「助けられなくて、すまなかったなジイさん……」

歩きながら考えた。

イロイロなことを

これからの生活、戦い、人生。でも考えるだけだ。いつもどおりだ。

「まずは、自警団に賞金首を倒した報告をしないとな」

賞金首を倒したことなどないのでどういった手続きをすればいいのか勝手がわからない。

まあ、行けばなんとかなるか。そんなことを考えていた。

> キラーマシンの腕輪<を装備した。

手に入れたアイテムはまず使ってみないといけない。

「僕に使うことができるのか」

エルフが使っていたアイテムだ。魔法が使えないと作動しないのかもしれない。

試しに今度の戦闘で使ってみよう。

しばらく歩くと町に着いた。なんとか無事に帰ってくることができた。

まずは、自警団の建物へ行く。

そこで賞金首討伐完了の手続きをする。書類に住所と名前、年齢。そして、賞金首を倒した経緯を書かされた。

その後に簡単な、口頭での聞き取りが行われ終了。

後日、現場検証と死体の本人確認が完了したら賞金を受け取るこ
とができるらしい。

だいたい一週間ですむとのこと。

「そんなにかかるのかよ。もう5ゴールドしかもってねえよ」

最初の予定だと、即日で給料がもらえるはずだったのだ。

今日、お金が入ると思ってたのに……。

途中から賞金首討伐のミッションになってしまったのは予定外だ
った。

けどそんな文句言っていても仕方ない。

「まあ、いいや。あの状態で生き残ただけでもめっけもんだ」

今日のところは大人しく家に帰って、有る物で飢えをしのごう。

そしてぐっすり寝よう。

すげえ、疲れた。

家に帰り、部屋に入ろうとすると大家さんに声をかけられた。

「アンタ、ずいぶん帰ってくるの遅いじゃない。何してたんだい
？」

（しまった……。今一番会ってはいけない人物に遭遇した）

「いやあ、ちょっと野暮用で……」

「そうかい、まあそんなことはどうでもいいんだけどさ。滞納してる家賃は何時払ってくれるのかね？」

言われると思った。最近顔を合わせるたびに聞かれる。

なんて金の取立てにきびしいババアだ。

まあ、2ヶ月も家賃を滞納してれば当然のことなんだろうけど。

「あゝ、ごめんなさい。2週間後には間違いなく払いますんで、もうチョット待ってもらっていいですか」

「何言ってるんだい。そんな信用できないね！何度同じセリフを聞いたことか」

「そこをなんとかお願いします」

手を合わせてお願いすると大家さんは、

「一週間だけ待ってやる。それ以上遅れたら今度こそ出て行ってもらおうよ！」

と吐き捨てるように言うとか家に帰っていった。

「ふーッ。やっぱりお金払う期日。長めに言っておいて良かった」
あのババアの考えなんてお見通しだぜ。

そのまま、自分の部屋に入ると一息つく。

「ノドがかわいたな」

そう独り言を言いながら水道の蛇口をひねる。

何も出てこない。

そうだ、水を止められていたんだった……。

僕は、だいぶ前から水道料金も払っていなかった。

・トロルとの戦い

+++

「スライムって食えるのかな」

そんなことを考えていた。あまりにも腹が減りすぎていたために。家にある食料は全部食べてしまった。

水は公園でなんとかなるから大丈夫だ。

残り少ない手持ちの金で買えるものなんて町になかった。

隣に住んでいる人に言って何か食べられる物を分けてもらおうか

……。

でも、朝会った時に挨拶するぐらいの面識しかないのに、いきなりそんなこと言ったら変な奴だと思われるよな。

そんなことはできない。

賞金の受け取りまで、後6日。

なんとなく町の外に出ることにした。

ここから先はモンスターが出る。

スライムが食べられるかどうか実際に試してみようと思ったのだ。それが駄目だったら、そこら辺に生えている雑草を採って食べてみよう。

しばらく歩いていると、ここら辺で一番メジャーなモンスターに出くわした。

狙いどおりだ。

ブルーの半透明で、ドロドロとしたゲル状の体が特徴のモンスター

！。

スライムが現れた。

僕は腰にさしてあった剣を抜き、スライムに斬りかかった。
スライムにダメージをあたえる。

スライムの反撃。

弾力性のある体で体当たりしてきた。

僕は吹っ飛ばされて地面を転がる。

「いつてええ！」

結構なダメージだ。

世界で一番弱いモンスターなのに大苦戦だ！
体勢を立て直してもう一度、斬りかかる。

スライムに剣を避けられた。

スライムは、体をムチのようにしならせて攻撃してきた。
急所に入った、鈍い音がする。大ダメージ！

僕はスライムの攻撃の反動で地面に叩きつけられた。
当たり所が悪かったんだろう。

口から血が出る。

「ヤバい……。内臓がやられてたら重症だ」

僕は逃げ出した。

「情けねえ……」

スライムにさえ勝てないのか。

いや、きつと腹が減っていたせいだ。
間違いない。

そくに決まってる。

そうであって欲しい。

ダメージを受けた所を確認したけど、大丈夫なようだ。
血が出たのは、口を切っただけだろう。

「ハア〜」

大きなため息をつく

「キヤ

！！」

女性の悲鳴が聞こえてきた。

声のするほうに駆け寄る

すると少女がモンスターに襲われてる。

人間の大人の5倍はあるだろう大きさ、緑色の醜い体。

手には巨大な棍棒。

「トロルかよッ!？」

何でこんな所にいるんだよ。

比較的安全なここら一帯の地域には出現しないはずのモンスター。
腹をすかせて山から降りてきたのだろうか。
なにせよスライムに歯が立たない人間では倒せるわけもない。

トロルが現れた。

トロルは少女に向かって棍棒を振りかざす。

「あぶねえッ！」

そう叫ぶと僕は、その場にタツクルするような体勢で飛び込み、
少女の体を抱えて敵の攻撃をかわす。

棍棒の強力な一撃ですさまじい轟音と共に 地面が砕けた。
大きな穴が開く。

意表を付かれたトルルは攻撃をミスした。

トルルは体勢を整えている。

どうしようあんな攻撃食らったら一撃で終了だ。

僕の人生が。

少女と一緒にいるので戦闘から逃げることもできない。

・エルフの少女

+++

少女は真っ白いワンピースの上に、同じ色のコートを着ている。袖とスカート、そしてフードの部分に赤い文字の紋様が描かれていた。

高度な魔術文字を意味するものだ。

きつとんでもない値段がする高級品の服だ。

僕はそんなどうでもいいことを、戦闘中に考えていた。

「大丈夫か？」

少女に声をかける。

「はい、なんとか」

避ける際、何処かに頭をうつたのだろう。

頭を左右にフルフル振っていた。

だが今はそんなことを気にしている場合じゃない。

「逃げられるか？」

他の選択はない。

少女にそう尋ねると、

「ごめんなさい。足をくじいたみたいで……動けません」と答えた。

「マジかよ」

「私を置いて逃げてください、あとは自分でなんとかしますから」
死ぬつもりだ。

おそらく冒険者だろう。死に際を心得ている。

「そんなことできるかよ」

と言いなからもトルルはどうすることもできない。
どうしよう。

「では私が呪文を唱えている間、時間を稼いでもらっていいですか」

「わかった!」

無理無理無理無理。

いきおいで返事しちゃったけど絶対無理。

無理だけどそれしか選択肢は無い。

彼女にはトルルに対向出来る魔法があるのだろう。

彼女の方を見ると、すでに詠唱に入っている。

もう移動はできない。

どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうしよう。

棍棒を受け止めたら僕が死亡。

棍棒を避けたら少女が死亡。

どちらにしても死人が出る。

そうだ、まだ使ったことないけど……

>キラーマシンの腕輪くを使った。

地面には光の魔術文字で描かれた魔方陣が現れた。

それに光が集まり【キラーマシン】が実体化。

キラーマシンが戦闘に参加する。

トルルはキラーマシンに向けて強烈な一撃を放った。

棍棒がキラーマシンにヒット。

ノーダメージ。

【キラーマシン】は戦闘態勢に入っている。

- ・使える武器は右手のサーベル。
- ・左手に魔法の弾丸を連射できるガトリングガン
- > 雷撃の弾丸<
- > 氷撃の弾丸<
- > 炎撃の弾丸<
- ・特殊能力：> 自爆<

僕は右手のサーベルを選択した。

キラーマシンはトロルに襲い掛かった。

右手のサーベルで切りつける。

グチャリ　という鈍い音がした。

トロルの頭は剣圧によって潰されて、体は真っ二つになり倒れる。
モンスターを倒した。

「うわぁ……。エグい」

僕の目の前にいたトロルは、グチャグチャの真っ二つになって死んだ。

キレイに分断されているのではなく、力任せに切り裂かれた感じ
で。

「ありがとうございます。私の魔法は必要ありませんでしたね」
助けた少女に笑顔で話しかけられた。

「いやいや、……まあね。怪我はない？」

自分が使った【キラーマシン】の威力に自分でドン引きしながら
答える。

「たいしたことはありません。大丈夫です」

さっきは戦闘中でバタバタしていたから気づかなかったけど、少女は笹のようなカタチの耳をしている。

先程の戦闘で詠唱していたスペルは黒魔法の一種……。

エルフの魔法使い。

でもおかしい。そんなエルフが存在できるのだろうか。

森の守護者であるエルフ族が使う魔法は、黒魔術ではなく精霊なのだから。

・エルフの少女 2

+++

助けた少女は足をくじいていたので「おぶって町まで行ってあげようか？」

と提案したが断られた。

きつと恥ずかしいのだろう。

でも、ちょうどいい。

少女を背負っていったら、僕の残り少ない体力は無くなり死んでいたかもしれない。

もちろんトロールではなくスライムにやられた時の傷が原因で。

「君、純粋なエルフなの？」

「はい、そうです。こちら辺では珍しいのですか？」

「あんまり見ないね。こちら辺は辺境だから」

（さすがエルフ、超美形だ）

超可愛い。いや、美しいといった方がいいだろう。

一見すると幼い感じがするのだが、ひとつひとつの所作が落ち着いている。

エルフということから、恐らく見た目どおりの年齢ではないのだろう。

芸術家が大理石から削り出したような、整った顔。

体のラインこそゆったりとした服を着ているため判断できないが、短いスカートから出たほっそりとした長い足は、年齢不相応の妖艶

な雰囲気を漂わせる。

左の太ももの部分には、古代魔法の文字が刺青として刻まれており、いやでも目がそこにいつてしまう。

白魚のようなほっそりとした指は、美しく長い。ここには刺青は無く、指輪もしていなかった。

普通の冒険者は自衛の目的から、選ばないだろう純白の魔導着。

そこに書かれた血のように赤い文字はさらに術者を目立たせている。服が少女を引き立て、少女もこの服を引き立てる。

一般的な魔法使いがよく使用する、詠唱用の杖は装備していない。代わりに持っているのは、左右の腕に銀色の腕輪、素材はプラチナ、ピンク色の宝石で古代魔術文字が刻まれている。

エルフの特徴である長い耳と同じく、大きな目も少しだけつり眼でありそれがなんとなく色つばい。

唇は桜色で、髪はブロンド、そして瞳は紅い。

(紅い眼のエルフ……)

柔らかそうな唇から言葉が紡がれる。

「お兄さん、すごいですね。あんなに強いモンスターを一発で倒しちゃうなんて」

「まあね」

自分でもびつくりだ。>キラーマシンの腕輪<はなるべく使わない方が良くかもしれない。

強力すぎるからだ。

「無駄な脂肪や筋肉が無いスリムな体つきですね」

「……まあね」

ヒョロいだけだ。貧乏で何も食ってないから細いんだよ。

「きつとレベルもすごく高いんですね？」

「……まあ……ね」

レベルは3しかありません。

最近強い敵を2体ほど倒しているが、自力で倒していない。

キラマシンは操っている女の人を倒したただだし、トロルはキラマシンの倒した。

これではレベルが上がるわけがない。

町の入り口が見えてきた。ここまで来れば安全だろう。

とりあえず彼女の怪我を見てもらうために医者に行かなくてはいいけない。

・フィウオン レイニーのお礼

+++

エルフを医者に見てもらったところ、怪我はたいしたことないらしい。

かるい捻挫だそうだ。

彼女はこの町の住人ではなく。旅の途中でモンスターに襲われるところを、僕に助けられたとのこと。

「ねえ剣士さま、お礼がしたいんですけど。これから時間あるかな？」

妙に支配的な紅い瞳が僕を見つめる。

「別に気にしなくていいよ。当然のことをしたまでだから」

「そう言わずに、お食事でもどうかしら。ご馳走しますよ」

これは飯にありつけるかもしれない。

今日のところは、これでなんとかしのげる。

「……じゃあ、せっかくだからご馳走になっちゃおうかな」

「そうしてよ。このままお礼もせずには帰してしまったら申し訳ないし」

「ではお言葉に甘えて」

僕たちは、食堂やレストランが集まっている通りに行ってお店を探すことにした。

歩きながら会話する。

「私の名前はフィウオン・レイニー。剣士さまはなんて言うのか

しら？」

「名乗るほどの名前ではないよ」

一度は言ってみたかったセリフだ。

ていうか下手に名前を教えたらレベルがバレル。それでも一応、

冒険者として国に登録されているのだ。

「ふふッ、変った方ですね」

ピンク色のちいさな唇の端が、ほんのちよつとつりあがる。

「ていうか剣士さまって言うのはやめてくれ。そんなガラじゃない」

まともに剣を使えてないので。

今日なんてスライムも倒せなかった。

「いいよ。じゃあお兄さんって呼んであげる」

「そうしてよ」

エルフの年齢がわからない。

僕はなんて呼べばいいのだろう、なんて考えていると、

「私のことは、フィウでいいよ」と言われた。

「わかった」

敬称が『ちゃん』にすればいいのか、『さん』にすればいいのか
解らん。

とりあえず呼び捨てでいいや。なんか言われたら変えよう。

しばらく歩くと目的の通りに到着した。

中央のほうまで歩いていくと高級レストランが並ぶ場所に出る。

「ねえねえ、お兄さん、お兄さん。食事はここのレストランなん
てどう？」

「……………」

すげえ高そうなレストランなんですけど。

城でもないのに、なんで店の前に門があるの。

門のところには、衛兵の代わりに黒い礼服をきた男が立っている。

「わたし、ここで食事したいなあ」

紅い瞳に見つめられると、なんとなく逆らうことができない。

「僕は別にかまわないけど、この格好じゃ断られるんじゃないかな」

小汚い皮の服、しかも帯刀している。

こういった場所は、きちんとした格好じゃないと断られるはずだ。

「きっと大丈夫だよ。わたしが確認してきてあげるね」

フィウは、礼服の男に近づいていった。

彼女は、男と一言、三言会話すると、こちらに手を振ってきた。

「OKだつて」

(……まじっすか)

僕はこんな高そうな店で食事したことが無かった。

・フィウオン レイニーのお礼 2

++++

店に入ると、背広を着た男に案内される。

僕は持っている剣を預け、フィウは上着を男に渡す。

上着を脱いだ彼女は、袖がない白いワンピースだけになる。

背の低さや体のシルエットから幼く感じていた雰囲気、よりいっそう強くなった。

ほっそりとした長い足に続き、あらわになる白い両腕。

冒険者とは思えないような、傷がないきれいな肌。

赤い文字の刺青があるのは、左の太もものところだけのようだ。

スカートの少し下、根元に近い場所の後ろ前に円を描くように刻まれている。

手や腕はもちろん首のところや、胸元もきれいなものだ。

なんとなくフィウに目がいつてしまう

それを見ていた彼女は、僕に妖しく微笑みかける。

通された席は、道路側で窓から外を見ることができた。

僕はお店の人にメニューを手渡された。

「さーて、何を食べようかな」

と思ったが字が読めねえ。

ていうか値段が載ってない。

「お飲み物はいかがいたしましたしょう？」

（えっ、何か頼まないといけないんですか……）

飲み物を注文しないといけないような雰囲気、その場に流れる。だがメニューが読めない、のでどんなモノがあるかわからない。

「フィウは何頼むんだい？」

彼女だったら、この何だか解らない文字で書かれたメニューを読むことができるであろう。

なにせ、自分でこの店を選んだのだから。

同じものを頼んでやる。

「お兄さんと同じものでいいよ」

「じゃあ、アルコールが入ってないやつでさっぱりした飲み物つて、どんなモノがあります？」

やられた。

無茶振りだ。

仕方ないので、お店の人に適当な質問をする。

「ではグレイプフルーツと炭酸水を使った、当店オリジナルのノンアルコールカクテルなどはいかがでしょう？」

「おいしそうですね。ではそれを2つお願いします」

「かしこまりました。それでは、今お持ちいたします」

疲れる。右も左もわからないから非常に疲れる。

「良い雰囲気だね、このお店」

「そうだね」

どんな料理があるんだかさっぱりわからね。

その後、飲み物を持ってきたお店の人に片っ端から、メニューに載っているのはどんな料理か聞きまくった。

・フィウオン レイニーのお礼 3

+++

高級レストランで食事をしながら僕らは話をした。

「そういえば、あのトロールを殺した機械の話なんだけど」
フィウに質問された。

「キラーマシンのことか。あれがどうかした」

「あれ…何処で手に入れたの？」

「この地域の国境近くにある研究所だよ」

「へえ」

フィウはなにか含みのある感じで答える。

「アルバイトで行った時に、その研究所で賞金首と出くわして戦ったんだ」

「【キラーマシン】って、高額賞金首だね。確か15000ゴールドの」

「そうだね」

ていうか食っているモノがうまい。

子牛のなんたら煮込み、なんとか風という覚えられないような名前の料理。

ソースが絶品で、肉が舌の上でとろけるようだ。

目の前のフィウが、僕に話しかけてくる。

レストランの中の暗い部屋でロウソクの火が揺れる。

その火に照らされたフィウの体が、少し艶かしく映し出された。

「そんな強い敵を倒すなんて普通じゃないよね。お兄さん」

「まあ、運が良かったただけだよ」

ホントに。ただそれだけ。

「よかつたら。その>キラーマシンの腕輪<をわたしに譲ってくれないかな？」

「え？」

「わたしにくれたら、とってもいいことしてあげる」

「……………」

「どんなことだと思う？」

「さあ」

「とっても気持ちいいこと」

「ダメだ。子供がこんなモノ持ってたら危ないだろ」

フィウは子供だかどうかかわからんし、僕が持っていてても危ないことには変りないけど。

「ちえー」

舌打ちをして悔しがるフィウ。その反応だけ見るとホントに子供のようだ。

「ご飯を食べ終わると彼女が泊まる予定の宿まで送って行くことになった。」

「明日、この町を案内して欲しいな」

「うーん、明日はちょっと忙し……………」

言いかけたところで、フィウに話しかけられる。

「案内してくれたら、お礼に300ゴールド出すよ」

「マジッすか」

「ご飯代も私が出してあげる」

やるしかねえ。どうせ明日の仕事のアテがあるわけではないし。

「引き受けよう。僕がこの町を案内してあげるよ」

「そう。ありがとう、お兄さん……」

これで明日の食ぶちは確保することができた。

・狙われるフィウオン レイニー

+++

朝の市場は、たくさんの人でにぎわっていた。

主に食料がメインで扱われているで、普通の人は見てもあまり面白くないのだけれど、フィウは楽しんでいるようだ。

物珍しそうに、色々な店を見て回っている。

朝食は市場にある広場で食べることにした。

「ところでフィウはこの町には何しに来たの？」

「観光」

彼女は売っているものを手に取りながら答える。

「こんな辺境に、わざわざ観光に来るなんて変ってるね」

この国の首都からは遠く離れ、一年を通して極寒の枯れた土地は作物も育たない。

住むのには、過酷過ぎる環境には動物もほとんどいない。

低すぎる温度は、モンスターでさえ拒絶する。

「そう？結構面白いわよ」

「それなら別にいいけど」

そんな話をしていると、僕らの隣でご飯を食べていたカップルの世間話が聞こえてきた。

「役人から聞いたのだけれど、この近くに【鉄の騎士団】が来ているらしいわよ。噂だとこの町を狙ってるんじゃないかって…」

…」

・【鉄の騎士団】

荒くれ者の元傭兵が集まってできた私設部隊。しかし、騎士団とは名ばかりでやっていることは盗賊と変わらない。

彼らに襲われた町は、すべての物が奪われ、何も残らない。

この地域には、この町以外に彼らの獲物としてめばしいモノはない。

十中八九、この町を襲うつもりだろう。

「どうしたの？」

黙り込んでいる僕にフィウが話しかけてきた。

「ああ、なんでもないよ。フィウ。観光は今日で終わりだ。僕が送ってあげるから、君の住んでる町に帰ろう」

【鉄の騎士団】に襲われたら、ろくな警備体制が敷かれていない、この町はひとたまりもないだろう。

「もしかして、【鉄の騎士団】を気にしているのかしら？」

「なんだ。聞いてたんだ。じゃあ、話は早い」

「逃げるの？」

紅い眼が僕を見つめる。

「そうだよ」

当たり前だ。まがいなりにも私設部隊、それを相手にして勝てるわけがない。

「でもきつとこの町の人たちは戦うわ。自分の住んでいる場所を守るために」

そんなことはわかってる。

極寒の荒地を一から開拓してきた人達だ。

自分たちが作り上げてきた町を安々と明け渡すはずはない。

「そんなこと言っただって、お前はどつするんだよ」

口調が少し荒くなる。

「あなたが戦うのなら、私も協力してあげるわよ。剣士さま」

彼女は僕のことを挑発するように言った。

・狙われるフィウオン VS 【鉄の騎士団】

+++

私設部隊、【鉄の騎士団】を相手にすることになった。

「あれだけ偉そうなこと言ってたんだからなんか良い案、あるんだろうね？」

僕はフィウに尋ねると、

「お兄さんの意見を先に教えてよ」と答えた。

まあ、いいや。僕の作戦をまず話そう。

「もう少ししたら、いや【鉄の騎士団】がこの町に来ることが確定したら 自警団による対策本部が設立されると思うんだけど」

「お兄さんは、それに入って戦うんだね」

フィウはうれしそうに言ってくる。

なにがそんなに楽しいのだろう。

死ぬかもしれないのに、いや死ぬ確率のほうが圧倒的に高いか。

「いや駄目だ。そんなことしてたら、敵を叩くチャンスが無くなる」

彼女の言ったことを否定する。

「じゃあ、どうするの？」

無邪気な子供のように、僕に尋ねてくる。

「地の利を生かす。溪谷を抜けるために使う、山を回りこむように作られた一本道がある。奴らがそこを渡り終わる寸前に爆破する」
対策本部ができるのなんて、敵が町の近くに來てからだろ。
そんなの待つてたら、相手の良いようにされるだけ。

敵が多かるうが、少なかるうが、戦力に余裕があるうが無かるうが先手を取ることが大事なんだ。
少しでも、こっちが有利な状況に持ち込む。

「え？でも渡つてる最中に壊した方が、たくさん敵を倒せるんじゃないの？」

「そんなことしたら、生き残つて逃げた部隊の奴らに体制を立てなおす時間を与えることになる。だから、まずは退路を断つ」

「残つた奴らは？」

「溪谷の橋を使つてきたらそこで迎え撃つて　橋を落とす」

「橋を使わないで山中を抜けてきたら？」

相手はプロの戦闘屋だからそつちの可能性が高いだろう。

わざわざ橋なんて、トラップしかけやすそうな場所使わないよな。

「まあ、橋を使えないように落としてから　うーん、あんまりやりたくないんだけど山に火を放つ」

「え　ッ？」

僕の言ったことに驚くフィウ。

「なにか？」

山に閉じ込めて、全員焼き殺す。

「ちよつと、やりすぎなんじゃないの？」

「だからやりたくないって言つてるだろ。でも、普通のやり方でやつてたら勝てないよ」

「キラーマシンは使えないの？」

「あれは駄目だ」

僕は【キラーマシン】を使っている間、無防備になる。

少人数ならまだしも多人数を相手にしたら一気にボロが出て、スキをつかれて殺されるのがオチだ。

「まあ、でもその案は却下ね」

フィウは、そんな話にならないわといった感じで両手を挙げて僕に言い放つ。

「なんで!？」

意味がわからない。

これ以上の作戦なんてあるのか。

フィウは、黙って自分のとがった耳を指差す。

「……………」

そうだ彼女は、エルフだ。

エルフを目の前にして、山を燃やすとか 非常にマズイ。
殺されても文句言えないレベルだった。

エルフは山を住処として、精霊と共に生きているのだから。

+++

僕は【鉄の騎士団】が陣営を敷いた場所のど真ん中に座り込んでいた。

鉄の騎士団の兵士達が、僕の周りにたくさんいる。武器の手入れをしたり、仮眠をとったり、簡単な食事を取ったり、話し合ったりしている。

数は40人ぐらいの一個小隊といったところだ。

(……思ったより数が少ないな)

だが、僕のことを気に留めるものは一人もない。

なぜならフィウの魔法によって僕の体は透明になり、見えなくなっているから。

しかし、見えないといっても敵の陣営の真っ只中、僕自身気が気でない。

見つかったら確実に殺されるだろう。

(ていうかこの作戦って、結局のところ正面突破だよな)

僕の考えた奇襲は、全面的に却下されたためフィウの考えた作戦が決行された

それはとんでもない考えであり、言うなれば大胆不敵なモノである。

どうしてこんなことをすることになったのか。

フィウの言葉に乗せられたからだろうか…… たぶん違う。

>キラーマシンの腕輪<という強い力を得て、舞い上がっていた
せいだ。

自分で気づかないうちに慢心していたのだろう。

うまくやれば自分の力で解決できるかもしれないと勘違いしてしまっただの。

結局のところ、それは【キラーマシン】という道具の力であり僕自身の能力とは全く関係ないのに。

今から3時間前

フィウは僕にとんでもない内容の話をする。

「いい？まずは相手を近くまでおびき寄せるの」

「それで？」

「相手はこの町を襲うために一度、軍の体制を整えるから、その時に強襲する」

「体制を整えるとは限らないよ。僕が敵だったら野営なしで町を攻撃する」

時間を置けば置くほど、相手に準備する時間を与え、攻略するのが厄介になる。

傭兵上がりの軍人がそんな悠長なことやるとは思えない。

「大丈夫。相手は油断している」

「うーん。【鉄の騎士団】の噂を聞く限りじゃそんな感じしないけどな」

「賭けてもいいよ」

彼女はそう言うけど、賭けに勝とうが負けようが関係ない。
選択ミスして死ぬのはゴメンだ。

「まあいいや。相手が野営をすると仮定して、その後どうやって
相手とやりあうつもりなの？」

「お兄さんと、わたしで協力してやっつけるの」

「……………」

無茶苦茶だ。

殺してくださいといわんばかりの作戦。

「まあまあ、話を最後まで聞いてよ」

「どーぞ」

一応最後まで聞こう。

「ちよつと見ててね」

フィウがそう言うと、彼女の気配が希薄になる。

そして、存在が認識しにくくなり、やがていなくなる。

「消えた！」

僕はあわてて前後左右見回す。

何処にも彼女の姿を確認することができない。

「どう？」

いきなり彼女の姿が現れた。

「うわッ！？いきなり出てくるなよ！」

びっくりした。

何と言うかパツと出てきたというよりは、彼女の姿を気づくこと
ができていなかった感じがする。

「いきなりしか出られないの。でもコレは使えんと思わない？」

「ああ、すげえな」

完璧に姿を消す技術もすごいけど……。

全く詠唱しないで魔法を使っていた方が驚きだ。

どっという仕掛けなんだ。あの腕輪に秘密があるんだろうか。

まあ今はそんなこと、どうでも良いけど。

「この魔法を使えば、気づかれないで敵のふところまで潜り込めるわ」

「潜り込んでどうするの？」

「キラーマシンを使う」

フィウは右手の人差し指を立てながらそう言った。

「だから、あれはダメだって」

対少数人数用の武器だ。

「操っている人間が何処にいるか解らなければ大丈夫だよ」

「うむむ」

確かにその通りだ。

キラーマシンを使う時のネックは二つある。

操るために近くに居ないといけない。

操作に集中するため無防備になる。

姿が見えなければ攻撃されることもない。二つの弱点を解消することが出来る。

単純に考えればだけど。

「わたしの魔法で、戦場に絶対攻め込まれない見えない城をつくる」

「……………」

「そして、そこでお兄さんが戦うの。わたしは絶対に本丸まで攻め込ませない」

フィウには相応自信があるんだろう。
全く引く気配がない。

「わかった、とりあえずそれで行こう。でも、相手が野営しないで突っ込んできたらこの作戦は無しだよ」

「いいよ。絶対に突っ込んでこないから」

彼女は胸のところで腕を組み自信ありげにそう言う。

なにを根拠にそういうことを言えるのか。その時の僕にはわからなかった。

+++

敵陣で、姿が見えなくなる魔法を使用中。

フィウの右手人差し指には、赤い火がともっている。

僕の常識的には、魔法使いの出す魔方陣は地面に書き込んだり、浮かび上がったたりする平面的なものだと思っていたのだけれど……。彼女の出したそれは、空中に光が投影されるカタチで存在していた。

僕らの周りを円を描くように、光の文字が立体的に浮かび上がる。どれだけ高度な技術なんだろう。それを操るフィウの精神力も相当なモノのはずだ。

僕は関心していた。

【鉄の騎士団】は、フィウに言われたとおり、見通しの良い平原に陣営を敷いていた。

何と言うか、完璧に油断している。

これから町に進撃しようとしている軍隊には見えない。

まあそれだけ、余裕ってことか……。

「よし、陽が沈む前にカタをつける」

どうせ僕とフィウは見えないのだから、闇にまぎれて襲いかかる必要はない。

視界が良い時に、仕掛けたほうが僕の狙いが定めやすい。

僕はフィウに戦闘を始める合図すると、彼女はそれに頷く。

>キラーマシンの腕輪<を使用した。

【キラーマシン】が戦闘に参加した。

何もないところから不気味な機械が現れたことに驚いた【鉄の騎士団】はあわてふためいている。

逃げ惑う兵士に向かって>雷撃の弾丸<を打ち込む。
兵士を一人倒した。

丸腰の兵士に向かってサーベルを振り下ろす。
兵士を倒した。

テントに向かって>炎撃の弾丸<を打ち込んだ。
激しく燃えさかるテント。

上半身はだかの兵士はキラーマシンに、剣で斬りかかった。
ノーダメージ。

キラーマシンはサーベルで反撃した。
兵士を倒した。

燃えさかるテントの中で兵士が3人倒れた。

兵士が弓でキラーマシンを攻撃。
ダメージを与えない。

> 雷撃の弾丸くで反撃。
兵士を倒した。

奥にあるテントに向かって> 炎撃の弾丸くを使用した。
テントは、激しい炎に包まれる。

圧倒的なキラーマシンの性能。

いくつもの戦闘をかくぐってきたはずの【鉄の騎士団】兵士が
いともたやすく殺されていく。

こちら側の一方的な攻勢は、僕の気分を悪くさせた。

人を殺すのは良くないことだ。そんなことはわかっている。

けどそんな中で、命のやり取りにおける人間の存在の重さみたいなモノが、全く感じられない。

このままだと自分の感覚がおかしくなっていく。

人を殺すことに何も感じない人間になってしまっ気がして怖くな
った。

「これからが本番ですよ」

フィウにそう言われ現実には引き戻された。戦闘中に余計なことは考えてはいけない。考えることは後だ。

鉄の騎士団、

【蛇騎士】 【サムライ】 【呪い師】 【炎使い】 が現れた。
6人の兵士が現れた。

サムライがキラーマシンに斬りかかる。

キラーマシンのボディに傷がついた。

呪い師が呪文を唱えると地面から泥の手が生え、キラーマシンに掴みかかる。

動きが鈍くなりサーベルが当たらない。

炎使いが口から炎を吐くとキラーマシンにヒット。ノーダメージ。しかし、勢いが衰えない炎が透明化している僕たちの方にもせまる。

（ うわッ!?! ）

炎はフィウが作った魔法陣にはね返される。
姿を消して魔法も防御できる。
すごい。

【猛獣マスク】が出現とともに、キラーマシンに襲いかかりダメージを与える。

戦闘は続く。

奥の方から、

「このデカ物を操っている奴が近くにいます。それを見つけてブチ殺せ！！」

と良く通る叫び声が聞こえる。

キラーマシンを近くで操っていることが敵に悟られた。
(……でも、いる場所はバレてない。まだいける)

キラーマシンに>雷撃の弾丸<>氷撃の弾丸<>炎撃の弾丸<を
乱射させる。

その場にいた6人の兵士を倒した。

蛇騎士、炎使いと猛獣マスクを倒した。

サムライは>雷電八刀流<を使用。

8本の刀がキラーマシンに一気に襲いかかる。

呪い師が筒のような銃を取り出し>不死鳥の弾丸<を撃った。

8本の刀でボディは切り刻まれ、弾丸がめり込む。

キラーマシンは、大ダメージを受けた。

さすがに凄腕の兵士の集まり。

簡単に勝たせてくれない、キラーマシンも結構なダメージを喰らった。

けれどもまだ致命傷は受けていないし、僕達が隠れている場所も
ばれる心配がない。

このまま押し切ればなんとかなる

「……ん??」

キラーマシンの動きが止まる。腕輪に全く反応しない。

魔力がなくなつたため動かなくなつてしまった。

「え　　ッ！？燃料切れとかあるのかよ！」

よく考えてみたら無尽蔵で動くほうがおかしい。

けど動いてもらわないと困る。

キラーマシンが動かなければ、僕にはもう打つ手がない。

最初にして最後の切り札。

これが無ければお話にならない。

そんなことは、お構いなしに【鉄の騎士団】が動かないキラーマシンに襲いかかる。

呪い師は自分の命を犠牲にして>ヤマタノオロチ<を使用した。

地面から八つの頭を持つ巨大な蛇が出現し、キラーマシンに攻

撃。

呪い師は死んでしまった。

大蛇に噛まれ、左腕がちぎれ右手も壊れた。

ボディは全損。

キラーマシンは壊れてしまった。

僕の装備していた、腕輪も碎ける。

「終わった……」

敵はまだ半分以上残っているというのに……。

+++

僕の切り札がなくなった時点で戦闘は終わった。

姿を消したまま、戦闘場所を離れようとしたが、

少なくとも僕はそのつもりだったんだけど、あっけなくフィウは魔法を解いた。

僕らの姿は透明ではなくなり、敵から確認できるようになる。

それを見た、敵の顔色が変わる。

先程、部隊に指令を出していた男が

「やつぱりお前の仕業だったのか、始の魔女さんよ」と言った。

「なんだわかってたのなら話は早いじゃない」

僕の隣にいるフィウがいつもより大人っぽい声のトーンでそれに答える。

僕は状況をイマイチ理解できずにいた。

フィウが超高額賞金首の【始の魔女】？

フィウは「降参するわ。私たちはこれ以上関わらないから、見逃してくれない？」と言う。

（なにを言ってるんだ、いまさらそんなの無理に決まってる……）
僕がそうを考えていると、

それを聞いた先程と違う男が、

「バカヤロー！！こっちは死人がでんだぞ！見逃すわけねーだ

る！！」

と叫んだ。

思ったとおりの返答。

「手負いのあんた達じゃ、私に勝てないわよ」

フィウはこんな状況にも関わらず余裕の表情で答える。

けど僕の考えとは裏腹に、この交渉に食いついてきた奴がいる。
さつき部隊に指令を出していた男だ。

おそらくコイツがリーダーだろう。

「お前が腕につけてる、魔法具を寄こしたら考えてやってもいい
ぜ」

そう言う口と口の端をつり上げ、いじわるく笑った。

「わかったわ」

あっさりと承諾するフィウ。

「オイッ！魔法具渡したら終わりだろ！」

魔法具がないと術が使えない。

しかし、僕の話など聞いてない感じで、フィウは手首から銀色の
腕輪を外して男に向かって投げる。

フィウの銀の腕輪が男の足元に転がる。

それを見た、指令を出していた男は、

「へへへ、バーカ。これでお前は魔法は使えねえだろ。残ってる
奴らでこいつらをぶっ殺せ！！」

やっぱり思ったとおりの反応。

僕はここで死ぬことになるらしい。

と思ったが違った。

【鉄の騎士団】が戦闘体勢に入ると、

「
」

フィウの目の色が変わる。

そして

「フィウオン・レイニーの名において命ずる

>フライング<と言うと、

自動防御魔法が発動した。

血の色をした無数のハチドリが彼女の周りを飛び回る。

彼女の詠唱が終わるまで自動的に防御。

【百識】

両腕の魔術制御を解除した

フィウオンの両手首に、血の色をした古代魔法文字が円を描くように刻まれる。

紋様一つにつき魔力は2乗される。

紋様は3個、フィウオンの魔力は8倍になった。

魔力の増大により使える魔法が増える。

フィウオンは>血のイカズチ<を唱えた。

フィウオンの周りに、円く波立つ血の色の雷。

波紋が広がる。

【鉄の騎士団】に向かって、血の色をした静かな雷が襲いかかる。

音も無く死んで行く兵士達。

地獄から聞こえる叫び声。

【鉄の騎士団】は、跡形も無く消滅した。

一瞬でカタがついた。

ていうか腕輪は無くても魔法使えるんだ……。

ていうか僕、いらなくね。

ていうか今まで【始の魔女】と一緒にいたんだ。

・狙われるフィウオン その後

+++

敵を片付けたフィウはまがましいオーラを放っている。黒い眼球の中に紅い眼がある。

超怖いんですけど。

「ところでお兄さん。キラーマシン無くなっちゃいましたね」
そんなフィウに話かけられる。

「そうですね」
なぜか敬語になる。

「あの機械は何のために研究所で開発されていたか知っていますか？」

「？」

「実は、私を倒すために作られていたんです」

「??」

「研究者がわざわざ賞金首リストに載せて、キラーマシンと腕利きの冒険者を戦わせて実験していたんですよ」

「……」

【始の魔女】を倒すために開発された【キラーマシン】

だからあんなに戦闘力が高かったのか。

その前に、あの機械は魔女に対向するための手段だったわけだ。それに危機感を感じたフィウはあの機械を探っていた。

僕に付きまとい、キラーマシンの腕輪を欲しがってたのは、それが理由だ。

「まあ、でもキラーマシンの戦闘能力も見れたし、本体も壊れたし、ヨカッタヨカッタ」

フィウが黒くて紅い目で僕を見つめながら笑う。

「……」

はめられた。

「あと付け加えておくけど【鉄の騎士団】が狙ってたのは、あの町じゃなくて賞金首の私ですよ」

「あー、なるほど」

どつりで町に攻め込まないわけだ。僕の早とちりってわけだ。

そうか早とちりで無くなったんだ、あの部隊。

【鉄の騎士団】の目的はフィウを倒すため。

フィウの目的は【キラーマシン】の性能確認と、キラーマシンの腕輪への破壊。

僕はフィウの手の中で踊っていただけ。

情けねえ。すべて彼女のいい様に物事が進んでいる。

「さてここで問題です。私の正体を知ってしまったお兄さんは、これからどうなってしまおうでしょう？」

悪魔のような表情と明るい声のトーンが全く合ってなくて怖い。

「やっぱり、口封じ的なコトをされるんですかね？」

殺されるのだろうか。

「ぴんぽーん。正解です。でも、お兄さんのことはお気に入りなので、私の使い魔になるんだったら助けてあげますよ」

「……」

「私に名前を教えてください」

「魔女に名前は教えない」

「使い魔にはならないって事でいいですかね」

「言うまでもねえ」

これでゲームオーバーだ。

「じゃあ 目をつぶって。苦しくないようにしてあげる」

「……………」

まあ、良かったでしょう。

【鉄の騎士団】は全滅させられたし、高額賞金首に殺されるなら冒険者としての面目もたつ。

餓死するよりマシだ。

本当は死にたくないけど。

どうあがいても勝てるわけがない。

僕は目をつぶった。

「じゃあ、いきますよ」

フィウが動く気配がし、僕は死ぬ覚悟を決め、

マブタをいつそう強く閉じる。

「ッ!？」

唇にやわらかい感触。

びつくりして目を開けると、フィウにキスされていた。
悪い冗談だ。全然、笑えない。

まがまがしい雰囲気は消え、目の色もいつものキレイな色に戻っている。

「えへへー、トロルに助けてもらった時のお礼です」

「何言ってるんだ」

その件は、ご飯を食べさせてもらった時に片付いているはずだ。

「殺しはしませんけど、しばらく監視させてもらいますよ」
とりあえず助かったんだろうか。

「…………ふっ」

ため息をつく。疲れた。ひたすら疲れた。

僕はそのまま目を閉じると、深いまどろみの中に身を落とした。

・大家さんからの依頼

+++

「水だ！この家、水道から水が出るぞ！」

僕は当たり前のことを、おおげさに喜ぶ。

滞納していた水道料金を払ったら水が出るようになった。

約一週間前に倒した敵の賞金を、ようやく受け取ることができたのだ。

次はこのボロアパートの大家のところに行かないといけない。

さっさと滞納している家賃を払わなければ、この汚い部屋を追いつ出されてしまう。

「いやあ、すみませんでした」

僕は2ヶ月間、滞納していた家賃を大家さんに渡す。

「まったく。ようやく持ってきたかい、次からは遅れるんじゃないよ！」

大家さんに注意される。

「わかりました」

払うアテがあれば家賃なんか滞納しないよ。

と考えながら大家さんの話を聞く。

では僕はこの辺で失礼しますと言って帰ろうとすると、

「ちょっと待ちな」

呼び止められた。

「なんですか？」

「確かアンタ冒険者とか言ってたね」

長い人生を歩んできたものにしか出せない意地の悪そうな声で、僕に確認する。

「ええ、一応」

レベルは低いけどな。

「ちょっと仕事を頼まれてくれやしないかい？」

嫌な予感しかない。

「別にかまいませんけど、どんな依頼ですか？」

家賃を滞納していた手前断ることができない、強制的に依頼を請けることになる。

「山に行つて、とつてきて欲しいものがあるんだよ」

「いいですけど、クマとかは獲つて来れませんよ」

僕が死んでしまうからだ。

「なに言つてんだい。そんなモン頼みはしないよ。直角ウサギとりんごをとつてきて欲しいんだ」

・【直角うさぎ】

角を持ったウサギ、移動する時は必ず直角に動く。

その身は食べることができ、柔らかい毛皮は売ることできる。

・【りんご】

名産品の果物。この地方で取れるりんごはとってもおいしい。

「いいですけど。いつまでにとつてくればいいんですか？」

「明日の朝までには欲しいね」

「無理ですね」

きつぱりと断る。

実質のところ、今日中じゃねーか。

今はもう夕方、今から山に入ったら夜になってしまう。

夜の山はとても危険だ。僕の手には負えない。

「チッ。しけてるね。じゃあ明日中でいいよ」

「それならいいですよ」

(……舌打ちされた！？)

このババア、人に物を頼む態度じゃねえ。

僕は【直角うさぎ】と【りんご】をとってくる依頼を受けた。

・大家さんからの依頼 2

+++

「よっしゃ ツ！」

【直角うさぎ】をようやく倒した。
2時間以上かけて捕獲。

うさぎを斬りつけようとするや直角に避けられ、僕が体勢をくずしたところに角で突っつかれる。

というのをずつと繰り返され、けっこうなダメージを受けた。
初級者向けモンスターに苦労しすぎだろ……。

でもあと残っているのはりんごを取ってくるという、ごくごく簡単なミッションだけなので心配ない。

山を下って、しばらく行くと【りんご】になっている木がある。
そのまま進んでいくと、看板があった。

『クマ注意!!』
と書いてある。

「ほう」

クマが出る山には、良くある看板だ。
きっと注意していれば大丈夫なのだろう。

ガサツ 物音がする。

「……ッ!？」

びっくりした。

クマが出現したのではなく、音がただけだということを確認してほっと胸をなでおろした。

なんだかんだ言ってもやっぱり怖いのだ。

だが、クマはモンスターと違う。

無差別に襲いかかってくるわけでない。

例え遭遇しても目をそらさずにゆつくりと後ずされば大丈夫。

……なはずだ。

大丈夫じゃなかった場合はもれなくアウトだ。

クマは力が強い。木に登る。足が速い。

僕のレベルでは勝てないので注意することしかできない。

でも実際のところはいくら注意していても、気の立っているクマにあつたらどうにもならないんだけどね。

直角ウサギもまともに倒せない冒険者には手に余る。

そんな感じでクマにビビりながらも、しばらく歩き丘を登るとりんこの木がある平地に着く。

無事、りんごをゲットした。

なんだ。

思ったより今回は簡単だったな。

直角うさぎは少し苦労したけど。

「てつきりクマとバトルになるかと思ったが、そうはならなかった」

きつと最近、激しい戦闘ばかりしていたので感覚がおかしくなっていたのだ。

いくら冒険者といえども、そうそう命のやり取りをしていたらたまらない。

命がいくつあっても足りなくなる。

「なんならババアに依頼されたモノを届けて、もう一回とりに来てもいいくらいだ」

食料を確保しておけば、お金が無くなっても困らない。転ばぬ先の杖だ。

どうせまた金欠になるのが目に見えているのだから、保険をかけておく必要がある。

「よし。もう一回やるか！」

僕がそう言うと、

なにか僕の後ろに回りこんだ気配がする。

クマかッ！？

後ろをゆつくり振り向くと、クマではなく知らないおっさんがいた。

「このりんご泥棒が！大声で『もう一回やる』とか叫びやがって。ずいぶん大胆な奴だな」

「すいません。自生している自然のりんごだと思ってたんです…

…」

どうやらさっきのあれは、りんご農園の木だったらしい。

長い時間をかけて無実の釈明をした後に、理由を説明してりんごを売ってもらった。

・フィウのお仕事

「あのクソババア……」

僕が今住んでるボロアパートの大家に頼まれた、直角うさぎとりんごをとってくるという依頼。

結局ただ働きだった。

お礼をもらえなかったのだ。

ババアにすれば家賃の延滞料金のつもりなのかもしれない。
むしろりんごを購入した分マイナスだった。

賞金首を倒してもらったお金も、そろそろ無くなってきたしどうしようか。

まあ、そんなこと言っても仕方ない。
地道に働くしかないだろう。

今日はエルフのフィウと会う約束をしていた。
始の魔女にして超高額賞金首。

強大な魔力は、一個小隊の敵でさえ一瞬で滅ぼす。
昼までにはアパートに戻らなくてはいけない。
約束に遅れたら殺されたりするのだろうか。

僕はアパートに戻り、ドアの鍵を開けると誰がいる。
ちょうど部屋の真ん中にある丸いテーブル。

その横にある備え付けの椅子に、背筋をまっすぐにしてフィウが座っている。

まるつきり少女の外見には不釣り合いな真っ黒なショートパンツに同じ色のタンクトップ。

その上からショールをコートのように羽織り、足には一般的なモノよりもさらに短いショートブーツを履いていた。

光を吸い込むような闇のショールは、長方形の端下の部分を丸くカットしてある。

小さい体には少し大きめではあるが、細くて白い足と腕を目立たせていた。

ブロンドの髪と黒は、相性が良くコントラストが美しい。

「他人の家に勝手に入るな」

僕は文句を言う。ていうかどうやって入ったんだ。

「ごめんなさい」

棒読み。

「…くッ」

反省している様子がまったくない。

気を取り直して質問する。

「今日はどうしたの？」

なんか用があるから、わざわざ会いに来たんだろ。

テーブルに両肘を着いて、僕を見つめる。

狭くて汚い、今にもぶっ壊れそうなアパートに高そうな服を着た美しいエルフ。

なんてシニールな映像だろう。

フィウは少し間をおいて話した。

「お兄さん。そろそろお金がなくなってきたんじゃないのかなと

思つて」

「……………」

「ご名答だ。」

「そんなお兄さんに、仕事を探してきてあげたよ！」

「ええ……………」

そんなこと頼んでないし。

大家のババアに続いて、嫌な予感がある。

「ねえ。一緒にしよう？」

フィウはイスから体をのりだし、甘えたような声を出しながら顔を近づけてくる。

彼女は僕の手を取り、両方のあったかい手でやわらかく握りしめる。

すごく気持ちいい。

「どんな仕事なの？」

僕がそうたずねると

子供のような顔がいやらしくゆがんだ。

・フィウのお仕事 2

+++

僕はフィウの仕事を手伝うことにした。

「それで、どんなことをするの？」

フィウは質問を聞くと説明をはじめた。

「MAP商會に捕まっている【エルフの少年】の救出が目的……」

【MAP商會】

天才、ウォーリー氏がたった一代で築いた巨大な会社。

主に投資で利益を出している。投資対象は武器製造、薬や人体の研究をする会社に限られる。

「エルフつながりって訳だ……。その子供は何で捕まったの？」

フィウの知り合いなのだろうか。

「奴隷商人にさらわれた後、売りに出されたとのことだ」

「何でまた……」

「希少種のエルフは高い値段で取引できるの。姿かたちも、きれいだから人気もあるらしい」

酷い話だ。

人間代表とまでは言わないが、僕が助けられるならそれに越したことはない。

「わかった、手伝うよ。それでなんで僕の助けが必要なの？」

フィウの魔力は高い、軍隊と戦っても勝てるのではないだろうか。

そんなエルフがなぜ、何の戦力にもならない僕の力が必要なんだろう。

「MAP商会は守りが異常に堅くて、正面から侵入するのが難しい。例え侵入できたとしてもセキュリティが厳しくて、中を動き回って調べることはできないと思う」

「ちよつと待つて。あの強力な魔法でも正面突破できないの？」
一個小隊を蒸発させた。赤い色の雷。

「MAP商会は兵器会社と強い繋がりがあるから 新型の武器で武装した兵隊に一度に攻め込まれたら、わたしでも間違ひなく殺されちゃうよ」

「そんなに強いんだ」
あんな強力な魔法を使えるエルフが対抗できない 想像できなかった。

「何言ってるの、お兄さんが使ってた【キラーマシン】あれだつて、これからの時代の武器だよ」

「……………」

そつえばそうだ。

僕のような低レベルな戦士でも使えるようなバケモノ。

トロールを一撃で切り裂き、手だれの兵士や冒険者を何人も倒した、悪魔の機械。

もう魔法だけ使つてれば戦闘に勝てる時代じゃないんだ。
だからと言つて僕がいてどうにかなる問題なのだろうか。

「実は3日後 MAP商会主催の新型戦闘用マシンお披露目パーティーがあるらしいんです」

「なにそれ？」

「もう、にぶいな。それに、わたしとお兄さんがカップルとし

て出席するんです。エルフ一人だと怪しまれる可能性があるから」
パーティーだったら屋敷の中に難なく入り込むことができる。

しかも、大きな会社のパーティーともなると、大勢の人が来て警備も手薄になるはずだ。

「なるほど」

そして、たいていのエルフは人間が嫌いだ

火を使い自然を壊し、争うことが理由だと聞いたことがある。

それなのに、一人で武器のお披露目パーティーにいたらおかしい。

「わたしがパーティーの最中に屋敷の中を探索する」

「わかった。僕はそれを手伝えばいいんだな」

二人で探せば、見つけるのも速くなるはず。

「いや、それはわたし一人でやるの。お兄さんには他にやること
があるわ」

僕にできることなどあるのだろうか。

「何をすればいい？」

「詳しいことは、まだ時間が有るから後で説明するけど。大まかに説明しちゃうと、ひと芝居打ってもらいたいだよ」

顔を覗きこむと、彼女の紅い眼が揺れていた。

・フィウのお仕事 3

++++

新型戦闘用マシンのお披露目パーティーが開かれる会場。

フィウが持ってきた（何処から手に入れたのかわからないが）招待状を使って侵入することができた。

MAP商会。

町外れの高い丘にあり、人を拒むように建っている。
会社というより要塞という方がふさわしい。

建物の周りには、（おそらく侵入者を防ぐためだろう、高い壁が存在している。

この中に捕まった【エルフの少年】がいるはずだ。

馬鹿でかい門のところで細かいセキュリティチェックを受けて中に入った。

当たり前だが武器は持ち込めない。

僕とフィウはパーティーのために正装していた。

服は比較的動きやすいものを選んだが、

「動きづらい」

なれない服には変りなく、動くたびに違和感がある。

「我慢してください」

フィウはそう言う。

いつもは口数の多いフィウ、でも今回の依頼の件を始めてから極端に話さなくなった。

きっとそれだけ難解な依頼なんだろう。

パーティ会場に着くとたくさん人であふれかえっている。中央に食事をするための丸いテーブルが配置されており、壁際にはさまざまな武器や防具が並べられていた。

銃器の弾はさすがに抜かれていたが、実際に手にとってモノを見ることができる。

でも、今日の最大の目玉である新型マシンはまだ無いようだ。

会場の中央に目をやると、今までより多くの人が集まっている場所がある。

その中心には、このパーティの主催者であるウォーリー氏がいた。

それを見たフィウが言う。

「ではそろそろ始めましょうか」

今回の作戦。

フィウが言うにはウォーリーにはエルフが必要らしい。

実験に使うらしいのだ。人間に比べて、はるかに長く生きるエルフを調べて、人の寿命をのばす薬を作ろうとしている。

死なない、もしくは長生きできる薬が完成すればこの会社に変な富をもたらす。

もし自分の命より長く生きることができるようになったら、いくらでも金を出す奴がいるだろう。

僕からウォーリーに話しかけようとしたが話しかけられない。

取り巻きが多いのはもちろんだが、たくさんの護衛もついており近づくこともできないのだ。

しかし、

「あいつはきつと新しいエルフを欲しがるはず」
それが彼女の言い分だ。

フィウに興味を引いてワナにはめようとしているのだけれど
話すことができないのならやりようがない。

しばらくすると、紅い眼のエルフに気づいたのであろう、ウ
オーリーがこちらに近づいてきた。

「はじめまして。このパーティーを主催させていただいているウ
オーリーと申します」

あちらさんから話しかけられた。

僕は、

「こちらこそ、ご紹介いただきありがとうございます」

とありきたりの返事をする。本当の所は、他人の紹介状で入った
身なので招待はされていない。

「パーティーは、楽しんでいただけていますか？」

「ええ、もちろん。……一番の楽しみはこれからなのでしょ
うけ
ど」

「ああ、メインイベントの話ですね。今までにないタイプの兵
器なので、きつと驚かれると思いますよ」

「なるほど。それは期待できますね……」

どんな恐ろしいモノが出てくるんだろう。

「どんな品物なのかは、後ほど説明いたしますよ。ところで
とても美しいお連れ様ですね」

フィウのことだ。

「ああ、彼女は私の屋敷で働いてもらっている使用人なんですよ」

「エルフが使用人！？そんな……信じられないですね」

それはそうだ。誇り高いエルフが人間の言いなりになるなどあり
えない。

「実は、いわくつきのエルフでしてね。目の色を見てくださ

い？」

「……ッ！？目の色が違う」

ウォーリーは驚いている。普通、エルフの目はブルーだからだ。僕は話を続ける。

「この目の色でエルフの里を追い出されたりしないのですよ。そこで僕が拾ってやったのです」

ここまでは台本通りだ。

・フィウのお仕事 4

++++

僕の話に食いつくウオーリー。

50代前半とのことだが、実際の年より若く見えた。
何と言つか存在感のある人物だ。

「ほう、それはスバラシイ。いや、……大変でしたね」

「もしや、エルフにご興味がありませんか？」
本題を切り出す。

「ええ、それはもう。エルフと一緒に生活できるなんて夢のよう
ではありませんか」

実際のところは、研究に使うのが目的なんだろうけど。

「よかつたらこのエルフ。お譲りしましょうか？」

「えっ!？」

表情を一変させ驚く。よほど興味があるのだろう。

「……いや、忘れてください。初対面でこんな話をするものでは
ありませんでしたね」

僕は、いったん話を取り下げる。

交渉をやめるのではない。エモノに針をより深く喰い付かせるた
めに。

「いえいえ、とんでもない。……もしそのお話し、本気でしたら、
お礼はそれなりにさせて頂きますよ」

ウオーリーは面白いほど話に乗ってくる。

「なるほど。まあ僕はどちらでもかまわないのですが……あとは、
彼女しだいですね」

僕はフィウのほうに顔を向けた。

その話を聞いたフィウが口を開く。

「ご興味を持っていただきありがとうございます」

それを聞いた。ウォーリーは彼女に話しかける。

「どうです、よかつたら私の元で働いてみませんか？それなりの待遇と報酬を用意しますよ」

「まあ、素敵です。でも、私を欲しいのなら条件があります。それで宜しければかまいませんが」

「ほう、どんな条件でしょう」

「ゲームをしたいわ」

「ゲームですか？」

あつけに獲られた顔をする。よほど意外な提案だったのだろう。

「ええ、私は人と争うのが大好き。私が欲しいのなら力づくで奪ってみて」

妖しく微笑むフィウ。

「なるほど。そういうことでしたらかまいませんよ。どのようなゲームでしょうか？」

迷いが無い、それだけエルフが欲しいのだろう。

「そうですね。では」

「なんででしょう？」

「【鬼ごっこ】をやりましょう」

「はて？聞いたことがない遊びですね」

その言葉をきいたウォーリーは困った顔をした。

「ルールは簡単です。追うものと追われるものを最初に決めて、追いかけてこを行うのです」

「わかりました。でそのゲームは何処でやりましょう？」

「私、この場所が気に入ったわ。ここでやりましょう！私が追い

かけられる方（鬼）ということでもよろしいかしら？」

「これから、あなたが働く場所になります。気に入ってもらえて良かった」

「制限時間はこのパーティーが終わるまで、私を追いかけるのに何人使ってもかまわないわ」

それを聞いた僕は耳を疑った。大事なパーティーの最中にやるのかよ。

そんなの相手が乗ってくるのだろうか。

「いいでしょう」

「では私が鬼で…、10分後にスタートです」

「いいでしょう。メインイベント前の余興にはちょうどいい。必ずあなたを捕まえて見せましょう」

話に乗ってきた。

下手したら新製品の発表会もだいなしになってしまうだろう。

そんなにエルフが必要なのか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2565z/>

理由がない悪意のクエスト。

2011年12月16日22時51分発行